

アジア連合への道

天児 慧著

鳩山前首相の掲げによって昨春秋、盛り上がった「東アジア共同体」論は首相交代を待たずに、国内政局に埋没し、世間の関心も薄れた。世界経済のけん引車としてのアジアの力が一段と増し、日本企業も多くが「アジア内需」を成長の糧にしようとするなかで、アジアの地域統合をめぐる議論はより実質的なものに変わっていく必要があるのはいうまでもない。

「包括的統合」の必要性論じる

本書はアジアの地域統合を理論研究や政治家の議論から実践段階に進めるために、人材育成こそ最も重要との認識で執筆された。著者は早稲田大学を舞台に「アジア地域統合を目標とする世界的人材育成」のプロジェクトをアジア各国の若手を集めて推進してお

り、実践者であることが本書に理論書とは違った勢いを与えている。

アジアの地域統合がなぜ必要かという根本問題について、著者は経済を中心に「デファクトとしての地域統合」が進むなかで、「系統的・持続的な問題処理のメカニズムを必要としていること」と明快な答えを示す。そのうえで、経済にとどまらず政治、安全保障などまで広げた「複合的包括的地域統合」への発展が必要と論じる。日本にとって地域統合の最大の論点は中国との統合関係になるが、著者は「関係立並び立つ」新思想で、突破すること提起する。アジア共同体を初心にかえて考えさせる好著だ。(筑摩書房・25500円)